

第31回美術工芸展

「創造力は毎日を変える」

全体リーダー 中村知子

2016年11月19日土曜日8日曜日の両日、第31回目となる美術工芸展を全校で開催した。4年毎におこなう本展は初日が雨だったにも関わらず、両日合わせ6,882人もの方々に来場していただくことができた。今回は「創造力は毎日を変える」をテーマとし、幼児から大学生までの年齢に応じた多様な作品群を展示した。美術工芸展の目的を、自由学園の一貫教育を美術作品を通して伝える機会とすること、恵まれた自然や日々の生活の中で育まれた生徒の姿を美術の作品を通して発表すること、また、この美術工芸展を通して今の自由学園を多くの方々を知っていただくこととした。また会期中の運営はすべて学生、生徒が中心となって行うが、その姿からも自由学園の実学の学びを知っていただく機会にしたいと考えた。

I. はじめに

パンフレットに掲載した高橋和也学園長と美術工芸教育顧問 滝沢具幸先生とみゆきの言葉をまず紹介する。

『美しい作品、美しい生活や社会は、自由で豊かな感性や想像力を土台として築かれます。知性、身体性、霊性ととも、感性を磨く事は、自由学園の教育の最も大きな柱の1つです。豊かな感性は、緑あふれるキャンパスでの毎日の生活と様々な体験を通じ、ゆっくりと養われてゆきます。今回の美術工芸展が、私たちの生活に潜む「美しさ」を表すものとなるように願っています。』

学園長 高橋和也先生 パンフレットより抜粋

『自由学園の美術は、身の回りの全てのものに対して愛情を持ち、それを大切にすることをから始まりま。人は自然の美しさを感じ、知り、そして自分からその感動を手で表現するのです。創作は何気ない身近な物作りから始まり、自身の手を使って考え感じながら作り出すことです。美術展は、幼児生活団から学部までの一貫した目標の中で育まれた創造の喜びを見ていただく機会であると思ひます。』

美術科特別顧問 滝沢具幸先生とみゆき パンフレットより抜粋

前回の4年前の美術工芸展をご高覧下さった三人の方から以下のようなお言葉をいただき、当日配布したパンフレットに掲載させていただいた。『美術工芸展を

訪れた時のことを今でも良く記憶している。作品から溢れてくる学生達の想像と高揚に満ちた作品に、見ているこちら心も震えたその感覚は、以来私の中にずっと刻まれている。

芸術を学ぶということは難しい。芸術とは、何かを得ていくというよりは、自分の中に在る、又は自身に日々重なる事象なるものがいかに心と共振、共鳴するのか自覚し、表現せずにはいられないという自発的欲求から生み出されていくものだからだ。4年に一度、機会が巡ることも、生み出すことへの欲求と意味を携えることに必要な時間なのだろう。

minä perhonen (ミナペルホネン) 皆川 明

『今年9月、自由学園の3年生から6年生を、初めて東京国立近代美術館にお迎えし、鑑賞学習を行いました。子どもたちはギャラリーの床に座り、目の前の絵や彫刻について、気付いたことや想像したことを、実に生き生きと話してくれました。美術教育では「作る」と見ることは一体である」とよく言います。描いたり作ったりする行為と、対象をよく見る行為は、同時に、あるいは繰り返しながら行われているという意味です。自由学園の子どもたちが、このように素晴らしい鑑賞が自然にできるのは、ふだんから生活の中でさまざまな体験や創作活動を行っているからなのだろうと思います。』

東京国立近代美術館 主任研究員 一條彰子

『「自由学園の美術には生活がある」今年いただいた初等部のカレンダーに描かれた子供達の作品を見ながら、この言葉が自然と私の中に浮かんできた。生活という言葉は何か古めかしいもののようにも思えるが、私にはこの言葉はとても新鮮なものとして響いてくる。描かれた、体操会やうさぎ。そして里芋、遠足、樹木。ここには確かに生きている子供達の目がある。そう、生活とは生きているということ。そして表現もまた、生きているということだ。私達が毎日行っている授業もこれと結びつく。

「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」羽仁もと子氏の言葉は今も自由学園の美術教育の中に生きつづけている。

福岡女学院中学校・高等学校 美術科教諭 瓦田勝

前回(第30回)美術工芸展終了後より、美術部会ではカリキュラムの見直しなどを行い実践してきた。前回同様、学校生活や他の教科等との総合的かつ横断的学びも含めた授業を行い、それらをわかりやすく展示することも目指した。また幼児から大学生までの各部の段階が見えるよう心がけた。美術教育の成果は他の教科や様々な生活体験との相乗効果によって育まれている。そこで学園の掲げる一貫教育と、美術教育のつながりを示すパネル展示も行った。なによりもまず生徒一人ひとりが美術の授業に真摯に取り組み、作品に一生懸命向き合っ制作することをめざした。またこの機会に、教科紹介のパンフレット「自由学園の美術教育」も新たに制作し、創立以来山本鼎やバウハウスの流れをくむ教育を行ってきたことも振り返りつつ、今学ばせたいことを再確認する好機となった。

II. 準備期間

美術展の前には初等部から学部まで、すべての生徒学生に「美術とは何か?」と言う問いを投げかけてみた。すると以下のような答えが返ってきた。
初等部「美術は嬉しいこと」「いっぱいわかることがふえる」「自分らしい絵は生きている」
女子部「普段とは違った景色の見方ができる。身近にあるものの形、いつもは気づかないことに気づく」「自分の言葉以外で表現する方法を学んでいる」「工夫でき

る頭を作る」「何かを壊してみること」「自分と向き合う時間」男子部「協力して作品を作る難しさを学んだ」「オンリーワンを作り出す喜びを知った」最高学部「先が見えない苦しみと楽しさ」「自分で悩んで生み出すもの」

このようにそれぞれの年齢に応じた率直な意見が集まり、各々がどのように美術と向き合っているかを知ることができた。

美術工芸展に際しての学生リーダーたちの思いをパンフレットから紹介する。

『百の花が咲き乱れるように、学園のキャンパスを鮮やかな作品と、輝く学生・生徒の姿で彩りたい、そのような思いで「百花繚乱」という目標を掲げました。自由学園における美術は、感性教育や学科の学びのみにとどまらず、私たちの生活と人間性に非常に密接な繋がりを持っています。今回の美術展では、私たちの日々を映し出した作品をご覧いただくと共に、私たちの生活と自由学園の教育にも触れていただけたらと思っております。』

最高学部リーダー 中田樹・内田清泉
女子部リーダー 遠藤なつき・久野秋絵
男子部リーダー 上野太誠・中島亮育

III. 展示と実際

来場者の観やすさを考え、幼児生活団幼稚園の作品を女子部の体操館で展示するなど、会場をコンパクトにまとめた。また各会場で生徒によるワークショップを行うなど、来場者が参加し美術に親しむ場を設けた。当日は午前と午後を担当教員が作品について解説するギャラリートークも実施した。その場で生徒に感想を述べてもらうなど、来場者に生徒の感じていることを直接伝えることができた。

開催告知のためのポスターやチラシのデザインは生徒の作品を用いて学部生徒が関わって制作した。ポスターは女子部高等科1年が「美術展のポスター制作」を課題とし授業で取り組んだものを生かした。また正門前の大きなモニュメントは男子部が制作。受付で配った入場証代わりの10種類の缶バッジは、幼児生活団幼稚園から学部までの全校生徒の作品から作るなど、各部の力を合わせ、協力することができた。

また、学園の卒業生が自由学園の教育を通じて、卒業した後どのように活躍しているかを紹介する「自由学園100人の卒業生 VOL. I」の展示も行った。それに関連し、学園を卒業後、写真家として活躍する公文健太郎氏の講演も行い、将来学園での教育がどのように生きていくのかという一つの例を示した。生涯教育の場として学園で行っている、40歳以上の学びの場である「リビングアカデミー」の作品も同時に展示し、社会につながる学園の教育の一端を二つの事から示した。

IV. 美術教育の発表としての展示

滝沢具幸先生の総評をまとめると以下のようであった。「美術展は私たちが日頃どのような姿勢で作品を作っているか、展示を通して考える機会である。今展のタイトル『創造力は毎日を変える』は、美術が日々の生活と共にありたいという自由学園の視点を表す言葉である。

幼児生活団体は女子体操館が会場で、大芝生を背景にした明るい空間の中で展示された。緑の芝生に置かれたカラフルな作品に遊ぶ子供たち。会場の中心に置かれた「ハトとばし」粘土合作に驚き、6才組が夢中でトリック様子を想像する。クリスマスの装飾やスタンピング、木の枝やおがくずの動物など、無邪気で楽しい作品が並んだ。

初等部は、入り口を入ると、まず目に入る大きなケヤキに圧倒された。根本の力強さと天井に伸びる姿は初等部の心意気を感じる。会場の構成は立体的で空間が美しく、各作品の特徴がよく見える。緑の木の向こうに誕生日の合作「つなひき」、「海の楽隊」、「水泳」。動物や虫のテーマ、カラフルなデザインも楽しい。実体験から制作された稲刈りの様子、収穫したサトイモのデッサンも良い。初等部の作品は常識にとらわれない、素直なもののびしたものばかりである。上の年代の生徒にとっても学ぶところが多いと思う。

女子部は陳列作品も多く、さまざまな素材を用いた基礎的な構成や色彩の勉強、自然の形から生まれたデザインなど積極的に取り組んでいた。特に学園の中の素材の活用が見られた。内覧の日に「自由学園の色彩には空気がある」との感想持ったが、秋の植物写生や

フェルト、ろうけつ染め、葉や花からのデザインは単なる色合わせではなく、色の響き合いに自然の光を感じることができた。芝生のペンギン、ゾウ、コウモリなど材木を使った動物も人気があった。果物と野菜の立体、アルミの作品、モビールも楽しく、絵画のレベルも上がったように思う。

男子部の芝生には、木を使った縄文時代を思わせる「塔」や小屋、木材の文具などが並び、男子体操館の展示へと誘導する。体操館の突き当たりの大壁画（北斎、国芳の模作）が見下ろす木工作品や墨で描いた風景、油絵、動物レリーフも楽しい。全体的に荒削りであるが、その中に繊細な面も感じられた。最高学部は絵画、工芸の作品として形を成した完成品としての展示がなされた。少ない時間の中で、それぞれが考えたアイデアやイメージをもとに制作された作品である。中では、2人で織り上げた大きなラグマットが美しく、フェルトのポンチョも会場空間に陳列された。陶芸（器や陶板）も表現の幅が出てきた。学園の廃材を利用した木工も良い。絵画は日本画、油絵の大作もあり、木版画作品も陳列された。デザインについては、基礎造形や生活美術の講義の中で行った墨を使った作品、写真やインスタレーションなど新しい試みもなされていた。

総じて、素材の活用と色彩の美しさが行かされたという印象が残る美術展となった。」

学園新聞12月号より抜粋

V. 生徒の学び

前回の反省では生徒自身がじっくり作品を鑑賞できないという問題があった。そのため今回は、前日に生徒たちが自分たちの作品を見る時間を「内覧会」と称して設けた。そしてあえて、普段教わっていない他の部の美術教員の講評を聞く機会を設けた。自分たちの作品を鑑賞したうえで、さらに普段聞くことの無い、他の部の教員の客観的な評価を知ること、その作品の「良さ」を観る視点を得る機会となることを目指した。

四年に一度の美術工芸展を目標として制作に取り組み、実際に自分たちの作品を多くの方に観ていただくことは生徒にとって大きな学びの機会である。普段出

来ない大きな合作に挑戦するなど、美術工芸展ならではの経験ができた。作品制作だけではなく、展示作業や会場作り、当日の運営など様々な場面で生徒たちが活躍する場でもあった。生徒は交代で会場に立ってお客様を案内した。食事や喫茶会場で接客や食器洗いの裏方などにも力を出した。また、ワークショップも各部署で実施し、生徒がお客様の制作のお手伝いをした。このように来場者に直に接する事を通じ、作品についての質問を受けたり、感想を伺ったりすることは、生徒にとって大きな勉強の機会である。それぞれが細やかに、また熱心に責任を果たし、会場全体の空気を高めていたことを嬉しく思う。来場した方々にも「生徒の会場での説明が丁寧だった」などの感想を戴き、今回の経験が生徒自身の成長に繋がったことを確信している。

VI. 来場者のアンケートから

来場者からは以下のような感想をいただいた。

「一人ひとりの作品も素敵でしたが、その作品が集まることで、より自由学園での生活や思いのエネルギーのようなものを感じることができました。(40代)」
「男子部はダイナミックな感じ、女子部は精細な感じが出ていた。一つ一つの作品がよく観察した上で制作されていることが伝わってきた。(50代)」
「幼児から美術の力がどのようについていくのかを知ることができ、興味深かった。(30代)」
「学園全体が1つの作品となっていて、学園の感性の高さが表現されていると感じた。学生だけでなく、リビングアカデミー、卒業生など学園を取り巻く人々や歴史など『総合としての学園』を感じられました。(50代)」

このような感想をうかがうことができ感謝である。

VII. 終わりに

盛況のうちに終えることの出来た美術工芸展であるが、男子部や学部のカリキュラム体制の見直しなど美術教科としての問題は山積している。恵まれた環境を十分に活かせるよう、体制を整えていく必要を改めて確認した。

豊かな想像力そして創造力、他者との違いを受け入れる力の必要とされるこれからの時代、美術教育の果

たすべき責任はますます問われている。創立者の羽仁もと子は「ただによい景色や美しい花を見たような時にだけ、僅かに美を感じることでできるような頑なな心でなしに、どういうものの中にも秘されている美を見ることができるよう深い心を培ってやりたい」と述べている。美術教育が公教育の中で狭められつつある昨今、学園の貢献できることがまだまだある。日々謙虚に学びつつ、次へと邁進していきたい。

最後に自由学園の教育を広く多くの方々に知っていただく機会とするという目標のもと、理事会をはじめとし、外部からたくさんの方のアドバイスを頂けたことに感謝している。

美術指導

滝沢具幸 古川武彦 武藤岩雄 大村富彦 清野圭一 宮井恵子
吉田文代 田村満恵 堀切由紀子 瀬尾道子 五十嵐富美
神谷珠子 川村格夫 石川愛
山下美記 中村知子 酒井恒太 金井知子 渡邊悠子
河原弘太郎 古川ゆめの 藤野和子



第31回 自由学園美術工芸展

念送 自由学園 入場無料 開場 9時30分 入場 16時30分 入場は16時まで 詳細は特設サイトにてお知らせします
2016年11月19日[土]・20日[日]

JIYU

創造力は毎日を変える。

第31回 自由学園美術工芸展

2016年11月19日[土]・20日[日]

会場 | 自由学園 入場無料 時間 | 9:30-16:30 (入場は16:00まで)
特設サイト | www.jiyu.ac.jp/event/2016art *詳細は特設サイトにてお知らせします
お問合せ | 自由学園広報本部 TEL.042-428-2122 FAX.042-422-1070 kb@jiyu.ac.jp
主催 | 学校法人自由学園 幼児生活園・初等部・女子部 | 中等科・高等科 | 男子部 | 中等科・高等科 | 最髙学部

生徒によるワークショップも用意しています

第31回 自由学園美術工芸展

自由学園では、「ただ美しい景色や美しい花を見たような時」にだけ、偶然に美を感じることも出来るような瞬間を大切に、いろいろなものの中にも探されている美を見ることが出来るような心を持ってやりたい」という創立者の思いを受け、山本勝(初代美術科主任)によって始められた「自分が直観感じたものを専ら美術」を實踐し、今日まで続けてきています。

自然豊かなキャンパスでの生活から生まれた美術作品を通して、日々の生徒たちの姿を感じていただければ幸いです。

ごあいさつ

美しい作品、美しい生活や社会は、自由で豊かな感性や想像力を土台として築かれます。知性、身体性、霊性と共に、感性を磨くことは、自由学園の教育の最も大きな柱の一つです。豊かな感性は、緑豊かなキャンパスでの毎日の生活と様々な体験を通じて、ゆっくと養われてゆきます。

今回の美術工芸展が、私たちの生活にひそむ「美しさ」を表わすものとなるように、一同心を込めて準備を進めています。皆様のご来場をお待ちしています。

——自由学園学園長 高橋和也

自由学園の美術は、身のまわりの全てのものに対して愛情をもち、それを大切にすることから始まります。

人は自然の美しさを感じ、知り、そして自分からその感動を手で表現するのです。創作は何気ない身近な物作りから始まり、自身の手を使って考えながら作り出すことです。

美術展は、幼児生活園から学園までの一貫した目標の中で育まれた創造の喜びを見ていただく機会であると思います。

——自由学園美術顧問 瀧沢良幸

日常の旅しよう。

美術展 | 1. (初等部) 女子部高等科 1年 幼児生活園 | 1. (合作絵) 3才児 2. (紙で作った動物のぼり) 4才児 3. (紙と木の工作) 6才児 4. (等身大の自分) 5才児 初等部 | 5. (画) 2年 6. (絵画) 3年 7. (絵画) 4年 8. (絵画) 5年 9. (絵画) 6年 10. (絵画) 7年 11. (絵画) 8年 12. (絵画) 9年 13. (絵画) 10年 14. (絵画) 11年 15. (絵画) 12年 16. (絵画) 13年 17. (絵画) 14年 18. (絵画) 15年 19. (絵画) 16年 20. (絵画) 17年 21. (絵画) 18年 22. (絵画) 19年 23. (絵画) 20年 24. (絵画) 21年 25. (絵画) 22年 26. (絵画) 23年 27. (絵画) 24年 28. (絵画) 25年 29. (絵画) 26年 30. (絵画) 27年 31. (絵画) 28年 32. (絵画) 29年 33. (絵画) 30年 34. (絵画) 31年 35. (絵画) 32年 36. (絵画) 33年 37. (絵画) 34年 38. (絵画) 35年 39. (絵画) 36年 40. (絵画) 37年 41. (絵画) 38年 42. (絵画) 39年 43. (絵画) 40年 44. (絵画) 41年 45. (絵画) 42年 46. (絵画) 43年 47. (絵画) 44年 48. (絵画) 45年 49. (絵画) 46年 50. (絵画) 47年 51. (絵画) 48年 52. (絵画) 49年 53. (絵画) 50年 54. (絵画) 51年 55. (絵画) 52年 56. (絵画) 53年 57. (絵画) 54年 58. (絵画) 55年 59. (絵画) 56年 60. (絵画) 57年 61. (絵画) 58年 62. (絵画) 59年 63. (絵画) 60年 64. (絵画) 61年 65. (絵画) 62年 66. (絵画) 63年 67. (絵画) 64年 68. (絵画) 65年 69. (絵画) 66年 70. (絵画) 67年 71. (絵画) 68年 72. (絵画) 69年 73. (絵画) 70年 74. (絵画) 71年 75. (絵画) 72年 76. (絵画) 73年 77. (絵画) 74年 78. (絵画) 75年 79. (絵画) 76年 80. (絵画) 77年 81. (絵画) 78年 82. (絵画) 79年 83. (絵画) 80年 84. (絵画) 81年 85. (絵画) 82年 86. (絵画) 83年 87. (絵画) 84年 88. (絵画) 85年 89. (絵画) 86年 90. (絵画) 87年 91. (絵画) 88年 92. (絵画) 89年 93. (絵画) 90年 94. (絵画) 91年 95. (絵画) 92年 96. (絵画) 93年 97. (絵画) 94年 98. (絵画) 95年 99. (絵画) 96年 100. (絵画) 97年



ワークショップ

生徒によるワークショップも用意しています。詳細は特設サイトにてお知らせします。

(特設サイト) www.jiyu.ac.jp/event/2016art

ひと目で分かる自由学園の感性教育

幼児から大学生までクラス全員で学ぶ美術・音楽・体育の姿を紹介しています。

自由学園100人の卒業生 シリーズ1

展示 | 多種多様な分野で、創造的に生きる道を切り拓いて活躍している卒業生の生きた方を紹介します。

講演 | 公文健太郎氏「創造する力・想像する心」

11月19日[土] 13:30-14:30 記念講堂

写真 | 1961年生まれ、2004年、自由学園最髙学部卒業(男子部60期生)。2012年、日本写真協会新人賞受賞。2016年、キヤノンギャラリーにて写真展「響く人」開催。

アクセス

〒203-8521 東京都東久留米市学園町1-8-15
西武池袋線ひばり駅南口より徒歩8分

- *駐車場はございませんので、車での来場はご遠慮ください
- *ペットを連れての入場はご遠慮ください(補助犬は入場可)
- *飲食の持ち込みは可能ですが、指定場所以外での飲食はご遠慮ください
- *校内は禁煙・禁酒となっております

